

氏 名	遠 藤 み ど り えん どう
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 613 号
学位授与の日付	昭 和 50 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	所謂内因性精神病の内分泌学的検討

論文調査委員 (主 査) 教 授 深 瀬 政 市 教 授 高 折 修 二 教 授 大 橋 博 司

論 文 内 容 の 要 旨

非定型精神病（第一報）及び鬱病（第二報）を対象として、諸種の負荷試験に際しての血中成長ホルモン(GH)及び血中 cortisol の動きを中心に検討を加えた。

§ 第一報：非定型精神病におけるインシュリン耐性試験時の血中成長ホルモン及び cortisol の変動

非定型精神病患者17例について、急性錯乱状態、鬱ないし亜昏迷状態、寛解状態の三つの時期においてインシュリン耐性試験 (ITT) をおこない、血中成長ホルモン、血中 cortisol 及び血糖の反応を検討した。本疾患群全体に共通した特徴は見出し得ず、状態像によって以下のように異なった傾向が認められた。

1) 血中成長ホルモンの反応

鬱ないし亜昏迷状態、及び寛解期の患者においては正常対照群よりも有意に低かった。急性錯乱期の患者においては一定した反応傾向がみられず、ばらつきが大きかった。

2) 血中 cortisol の反応

急性錯乱期の患者では正常対照群より著明であり、鬱ないし亜昏迷状態、及び寛解期の患者では対照群と有意差がなかった。

3) 血糖の反応

患者群は、何れの状態像を呈していたものについても、最低血糖値に関しては正常対照群と有意差をもたなかった。

以上の結果をもとに、鬱状態、急性分裂病様状態、ストレス状態等に関する諸家の報告を参照して若干の考察をおこなった。

§ 第二報：鬱病における血中成長ホルモン及び ACTH-cortisol 系の諸種負荷に対する反応

鬱病患者11例において鬱期および回復期の二回にわたり ITT, rapid ACTH test, デキサメサゾン試験およびメトピロン試験をおこない、血中 GH、血中 cortisol 及び血中 ACTH の変動を検討して次の結果を得た。

1) 血中 GH

鬱期においては ITT 及び rapid ACTH test に対する反応が低下する傾向が認められた。

2) 血中 cortisol

午前8時及び午後8時の二回測定の結果では日内変動の基本パターンは保たれていたが、鬱期には午後8時に正常よりも高い値を呈する例が認められた。また同じく鬱期において、深夜のデキサメサゾン投与により早朝値があまり低下しない例も存在した。ITTに対する反応は鬱期においても回復期と同程度で、正常対照群と有意差がなかった。しかし rapid ACTH test に対しては鬱期における反応の方が回復期よりも著明であった。

3) 血中 ACTH

深夜におけるメトピロン投与後の血中 ACTH の早朝値は鬱期と回復期とではほぼ等しかった。

以上の結果から鬱状態と神経内分泌調節機構との関連について若干の考察を加えた。

論文審査の結果の要旨

第1報では所謂内因性精神病と内分泌の関連を追求する端緒として、非定型精神病患者におけるインシュリン負荷時の血中成長ホルモン (GH) 及び血中 cortisol の動きを検討した。本病全体に共通の特徴は見出しえなかったが、鬱状態及び寛解期では血中 GH の反応が低く、急性錯乱期では血中 cortisol の反応が高い傾向にあることが示された。故に本病の内分泌機能を論ずるにあたっては検査時の患者状態像を十分考慮する必要がある。

次に第2報においては鬱病患者を対象として諸種の負荷試験時の血中 GH, 血中 cortisol 及び血中 ACTH の変動を鬱期, 回復期に分けて検討した。鬱期にはインシュリン耐性試験 (ITT) 及び rapid ACTH test には回復期よりも著明に反応した。メトロピンに対する血中 ACTH の反応は鬱期と回復期で同程度であった。

以上により、本研究は内分泌学的検討を通じて内因性精神病の病態を解明する上に寄与するところが大である。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。